

源氏物語

早蕨

紫式部

青空文庫

早蕨さわらびの歌を法師す君に似ずよき言葉を

ば知らぬめでたさ

(晶子)

「日の光林やぶ敷しわかねばいそのかみ古ふるりにし里も花は咲きけり」と言われる春であつたら、山莊のほとりのおいやかになつた光を見ても、宇治の中の君は、どうして自分は今まで生きていられたのであろうと、現在を夢のようにばかり思われた。四季時々の花の色も鳥の声も、明け暮れ共に見、共に聞き、それによつて歌を作りかわすことをし、人生の心細さも苦しさも話し合うことで慰めを得ていた。それ以外に何の楽しみが自分にあつたであろう、美しいとすることも、身にしむことも語つて自身の感情を解してくれる姉君を、そのかたわらから死に奪われた人であつたから、暗い気持ちをどうすることもできず、父宮のお亡かくれになつた時の悲しみにややまさつた悲しさ恋しさに、日のたつのも悟らぬほど歎き続けているが、命数には定まつたものがあつて、死にたくても死なれぬのも人生の悲哀の一つであると思われた。

御寺みでらの阿闍梨あじやりの所から、

年が変わりましたのちどんな御様子でおいでになりますか。御みほとけ仏へのお祈りは始終いたしております。今になりましてはあなた様お一方のために幸福であれと念じ続けるばかりです。

などという手紙を添え、わらび蕨や土筆を風流な籠かごに入れ、その説明としては、

これは童子どもが山に搜して御仏にささげたものです、初物です。

とも書かれてあった。悪筆で次の歌などは大おおぎ形に一字ずつ離して書いてある。

君にとてあまたの年をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり

女によお王様に読んでお聞かせ申してください。

と女房あてにしてあった。一所懸命に考え出した歌であろうと想像されて、つたない中に言つてある心を身にしむように中の君は思い、筆任せに、それほど深くお思いにならぬことであろうと思われることを、多くの美しい言葉で飾つてお送りになる方の文ふみよりもこのほうに心の引かれる気がして、涙さえこぼれてきたために、返事を自身で書いた。

この春はたれにか見せんなき人のかたみに摘める峰のさわらび

使いには纏頭てんとうが出された。

盛りの美しさを備えた人が、いろいろな物思いのために少し面瘦おもやせのしたのもかえつて貴女きじよらしい艶えんな趣の添ったように見え、総角あげまきの姫君にもよく似ていた。いっしょにいたころはどちらにも特殊な美しさがあつて、似ているように見えなかつたのであるが、今ではうかとしておれば大姫君であるという錯覚が起るのを、遺骸いがいだけでも永ながくとどめてながめていられるものだったならばと、朝夕に恋しがつていた源中納言の夫人になつておいでになればよかつたものを、運命のそれを許さなかつたのが惜しいと思い、女房たちは残念がつていた。薫かおるの家のほうから始終出て来る人があつてそちらのこともこちらの様子も双方でよく知つていた。まだ総角の姫君に死別した悲しみに茫ぼう然ぜんとなつていて、涙目の人になつていると中納言のことの言われているのを聞いて中の君は、中納言の姉君に持つていた愛は浅薄なものではなかつたと、いつそう今になつて身にしむようにその人の恋が思われるのであつた。

兵部卿ひょうぶきょうの宮は宇治へお通いになることが近ごろになつていつそう困難になり、不可

能にさえなつたために、中の君を京へ迎えようと決心をあそばした。

御所の内宴などがあつて騒がしいころを過ごしてから薫は、心一つに納めかねるような愁^{うれ}いも、その他のだれに話すことができようと思い、匂^{にお}宮^{みや}の御殿をお訪^{たず}ねした。しめやかな早春の夕べの空の見える所に宮は出ておいでになった。十三絃^{げん}をお弾^ひきになりながら、例のお好きな梅の香を愛してもいられたのである。薫はその梅の花の下枝を少し折つて、手に持ちながらはいつて来た。艶^{えん}な感じが覚えられることであつた。宮はこの早春の夕べにふさわしい客をうれしくお思いになり、

折る人のこころに通ふ花なれや色にはいはず下にほへる

とお言いになると、

「見る人にかごと寄せける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

私が困ります」

薫も冗談じようだんにしてこんなことを申し上げた。並べて見るに最もよく似合った若い貴人

と見えた。しんみりとした話になっていつて、どうしているかと宇治のことをまず宮はお聞きになった。薫も恋人に死なれた悲しみを言い、初めから今までのその人に關する物思いの連続を、そのおりあのおりと、身にしむようにも、美しくも泣きながら、笑いながらというように話し出したのを、聞いておいでになって、繊細な感情に富んでおいでになり、涙もろい癖の宮は、他人のことながらも、袖そでを絞るほどの涙をお流しになって、熱心な受け答えをあそばされるのであった。天もまた哀愁の人に同情するかのようにな、空を霞かすみがぼんやりこめて、夜になってからは烈はげしく風も吹き出し、まだ冬らしい寒さが寄よってきて灯も消えた。「春の夜の闇やみはあやなし」というようなたよりなさではあったが、話す人、聞く人もそれを障さわりにしてそのままにやむ話ではなかった。どんなに語つても中納言は心の晴れることを覚えないまままで深更になった。世の中にまたたぐいもないような精神的愛に止まったという薫の話を、必ずしも終わりまでそうではなかったであろうと宮の思ひになるのも、御自身から割り出してお考えになるからであらう。そうではあるが他の点では御想像が穎敏えいびんで、薫の気持ちをよく理解され、悲しみも慰めるに足るほどな言葉をお出しになった。一つは御容姿のお美しさが心をよく賺すかして、結ばれの解けぬ歎きを少しづつ

語つていかれるのは非常に氣の樂になることのように薫に思われたのである。

宮も近日に中の君を京へお迎えになろうとすることで中納言へ御相談をあそばされると、「非常にけつこうなことでございます。あのままになりましては私の責任になります」と苦しく思つておりました。昔の人の名残なごりの家も、あの女王があなた様のものであれば、今では私のお訪ねたずして行く名目に困つていたのでした。しかしただのお世話は十分に私がせねばならぬ方だと思つていますが、そのことで御感情を害するようなことはないでしょうか」

と薫は言い、なお故人が以前に、自分と同じものと思えと言ひ、中の君と自分の結婚を望んだことも少しお話ししたが、あの中の君と兄きょうだい妹のような心で語つていた寢室の一夜のことには触れなかつた。心の中では、こんなにも悲しまれる日の心の慰めとして妻に得ておくべきであつて、宮がなされようとするがごとく京へその人を迎えることもできたのであつたと、残念な気持ちがよくやく深くなつていくのである。今はもう思つても何の効かいもないことを、しかも始終それを思いつめておれば、なしてならぬことをなしたい心も出てくるであらう、それは宮の御ため、中の君、自分のためにも人笑われなことに違ひないといこうこの人は反省した。それにしても中の君が京へ移ることになつての仕度したくその他に

ついで、自分のほかにだれも力になる人はないのであると薫は思い、手もとでいろいろな品の新調などをさせていた。

宇治でもきれいな若女房、童女などを捜して雇い入れ、女房たちは幸福感に浸っているのであるが、いよいよ父宮の遺愛の宇治の山莊を離れて行くことになるのかと中の君は心細くて歎かればかりする、そうかといつて寂しさに堪えてここに独居する決心もできそうになかった。宮から熱愛はしていながらもこのままでは自然に遠い仲になっていくかもしれないぬのをどう思っているかと恨んでおよこしになるのも少しお道理に思われるところもあったので、どうすればよいかとばかり煩悶^{はんもん}する中の君であった。二月になったらすぐということであつたから、近づくにしたがい咲く花の蕾^{つぼみ}も大きくふくらんでくるのを見ては、春の花のすべてを見ずに行くことが心残りに思われ、帰雁^{きがん}のように霞^{かすみ}の山を捨てて行く先は、自身の家でもないことが不安で、宮の愛が永久に変わらぬものと見なされぬ心から寂しい未来も考えられてひそかに思い悩んでいるのであつた。

姉の服喪の期間は三月であつて、除服の禡^{みそぎ}を行なうことになっているのも飽き足らぬことに中の君は思つた。母夫人とは顔も知らぬほどの縁であつたから、恋しいとは思ひようもなかったが、そのかわりとして子の服喪を姉のためにしたい心であつたが、これは定ま

ったことであつてにはならなかつた。禊の日の女王の車、前驅を勤める人々、守刀などが薫のほうから送られた。

はかなしや霞かすみのころもたちしまに花の紐ひもとく折をりも来にけり

添えられたこの歌のように、春の花のいろいろに似た衣服も贈られたのであつた。京へ移つて行つた日に入り用な纏てんとう頭に使う品、それらもあり大おおぎ形ようには見せずこまごまと氣をつけてそろえて届けられたのである。何かのおりには親身な志を見せる薫を喜んで、女房たちは、

「こんなにまでは御兄弟だつてなさるものではございませんよ」

などと中の君に教えるのであつた。こうした老いた女の心には物質的の補助ほどありがたいものはないと深く思われるので、自然これを女にょ王おうに知らせようと努めるのである。若い女房たちは時々来る薫に親しみを持っていて、

「いよいよ姫君がほかの方の所へ行つておしまいになつては、どんなにあの方様が恋しく思おほしめ召めすことでしょう」

と同情していた。

薫^{かおる}自身は山莊の人の京へ立つのが明日という日の早朝に訪^{たず}ねて来た。例の客室にはいつていて、月日が自然に恋人と自分を近づけていき、妻とした大姫君を、今度の中の君のようにして京へ迎えることを、自分のほうが先に期していたのであったと思い、大姫君の生きていたころの様子、話した心を思い出して、絶対に自分を避けようとはせず、もつてのほかなどと自分をとがめるようなことはなかったのに、自分の気弱さからついに友情以上のものをあの人にいだかせずに終わつたと考えると、胸^{むね}が痛くさえなるほどに残念であつた。父宮の喪中にここから仏間にいるのをのぞいて見た北の襖^{からかみ}子の穴も恋しく思い出されて、寄つて行つて見たが、中の室^{へや}は戸が皆おろしてあつて暗いために何も見えない。女房も薫の来たことによつて昔を思い出して泣いていた。中の君はましてとめどもなく流れる涙のために茫^{ぼう}となつて横たわつていた。

「伺うことのできませんでした間に、何をどうしたということはありませんが、絶えぬ思いの続きました一端でもお話をいたして心の慰めにさせていたきたいと思います。例のように他人らしくお扱いにならないでください。いよいよ今と昔の相違を深く覚えることになつて悲しいでしょうから」

と薫から中の君へ取り次がせてきた。

「失礼だとは思われたくはないけれど、私は今気分も普通でなくて、何だか苦しいのだから、いつそうそんなことでわからぬお返辞を申し上げたりすることになってはならないと御遠慮がされる」

と言ひ、中の君は氣の進まぬふうであつたが、御好意に対してそれではと女房らに諫められて、中の襖子の口の所で物越しの対談をすることにした。氣品よく艶で、今度はまた以前よりもひときわまさつたと女房たちの目も驚くほど美しさがあつて、だれにもない清楚な身のとりなしの備わっている薫は、これ以上の男がこの世にはあるまいと見えた。中の君はこの人に亡き姉君のことをさえまた恋しく思われ、身に沁んで薫を見ていた。

「取り返しがたい方のことも、今日は縁起を祝わねばなりませんからお話をさし控えたほうがよろしいでしょう」

と中納言は言ひ、ややしばらくして、また、

「今度おいでになるお邸の近い所へ、私の家もまたすぐに移転することになっていきますから、夜中でも暁でもと能弁家がよく言いますように、何事がありましても私へ御用をお言いくださいましたなら、生きておりますうちはどんなにもしてあなた様のために尽くそう

と私は思っているのですが、あなたは どう思ってくださいますか、御迷惑にはお感じになりませんか。出すぎたお世話はいけないかもしれぬのですから、自分の考えをよいこととばかり信じても行なえませんかから、お尋ねするのです」

こう言うと、

「この家を永久に離れたくないように思われます私は、近くへ来るなどとおっしゃるのを承つていますだけでも心が乱れまして、何とお返辞を申し上げてよろしいかもわかりません」

所々は言おうとする言葉も消して、非常に物悲しく思っている様子が見えるところなどもよく大姫君に似ているのを知つて、自身の心からこの人を他へやることになつたとくちおしく思われてならぬ薫であつたが、効かゐのないことであつたから、あの以前のある夜のころなどは話題にせず、そんなことは忘れてしまったのかと思われるほど平静なふうを見せていた。近い庭の紅梅の色も香もすぐれた木は、鶯うぐいすも見すごしがたいように啼ないて通るのは、まして「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」という歎きをしている人たちの心を打つことであろうと思われた。さつと御簾みすを透かして吹く風に、花の香と客の貴人のおいの混じつて立つのも、花はな橘たちばなではないが昔恋しい心を誘つた。つれづれな生活の慰めにも人生の

悲しみを紛らわすためにも、紅梅の花は姉君の愛したものであつたと思ふことが心からあふれて、

見る人もあらしにまよふ山里に昔覚ゆる花の香ぞする

と言うともなくほのかに絶え絶えに言うのを、薫はなつかしそうに自身の口にのせてから、

袖そでふれし梅は変はらぬにほひにてねごめうつろふ宿やことなる

と自作を告げた。絶えない涙をぬぐい隠して、あまり多くは言わぬ薫であつた。

「またこんなふうにして何のお話も申し上げようと思います」

と最後に言つて立つて行つた。

薫は中の君の出京について心得ておくことを女房たちに言い、山莊の留守居るすいにあの髭ひげお男とこの侍などが残るであろうことを思つて、ここに近い領地の支配をする者を呼び寄せて、

今後もここへそれらの人の生活に不足せぬほどの物を届けさせる用も命じた。

弁は中の君の移る二条の院へ従つて行こうとも思わず、さまざまのことに出あつて自身の長生きするのを恨めしい気がするし、人が見ても無気味な老女と思うであらうから、もう自分は存在しないものと思われるようにと言つて、尼になつていた。そして引きこもつていた部屋へやから薫はしいて呼び出して、哀れに変わった面影のその人を見た。いつものように大姫君の話を薫はして、

「ここへは今後時々私は来るつもりなのですが、知った人がいなくなつては心細いのに、あなたがあとへ残つてくれるのは非常にうれしい」

など皆も言うことができず泣いてしまった。

「世の中をいといばいとうほど延びてまいります命も恨めしゅうございますし、また私をどうなれとお思ひになつて、捨ててお死になつたのかと女によおう王様も恨めしゅうございまして、人生に対して片意地になつておりますのも罪の深いことと思われましてね」

と、尼になるまでの気持ちを弁の訴えるのも老いた女らしく一徹に聞こえるのであつたが、薫はよく言い慰めていた。非常に年は取っているが、昔の日に美しかった名残なごりの髪を切り捨て後ろ梳ずきの尼額になつたために、かえつて少し若く見え雅味があるようにも思わ

れた。故人の恋しさに堪えない心から、なぜあの人の望みどおりに尼にさせなかつたのであろう、そうしたならあるいは命が助かつていたかもしれないか、そして二人して御み仏ほとけに仕え、ますますこまやかな交情を作つていきたかつた、とこんなことさえ思われる薫には、弁の尼姿さえうらやまれてきて、身体からだを隠すようにしている几帳きちようを少し横へ引きやつて、親しみ深くいろいろな話をした。見た所はぼけたようではあるが、ものを言うけはい気配などに洗練された跡が見え、美しい若い日を持つていたことが想像される。

さきに立つ涙の川に身を投げば人におくれぬ命ならまし

悲しそうな表情で弁の尼は言った。

「それも罪の深いことになるのですよ、そんな死に方をしては極楽へ行けることがまれで、そして暗い中ちゆううちう有に長くないければならなくなるのもつまりませんよ、いつさい空くうとあきらめるのがいちばんいいのですよ」

とも薫は教えた。

「身を投げん涙の川に沈みても恋しき瀬々に忘れしもせじ

どんな時が来れば少しでも心の慰むことが発見されるのだろう」

と薫は言い、終わりもない哀愁をいだかせられる気持ちでした。

帰って行く気もせず物思いを続けているうちに日も暮れたが、このまま泊まっていこうとは人の疑いを招くことになりやすいからと思ひ帰京した。

源中納言の悲しんでいた様子を中の君に語って、弁はいっそう慰めがたいふうになっていた。他の女房たちは楽しいふうで、明日の用意に物を縫うのに夢中になっていた。老いて醜くなった顔に化粧をして座敷の中を歩き歩いていたりしている一方で弁は、いよいよ世捨て人らしいふうを見せて、

人は皆いそぎ立つめる袖のうらに一人もしほをたるるあまかな

と中の君へ訴えた。

「しはたるるあまの衣に異なれやうきたる波に濡るる我が袖ぬ

世間へ出て人並みな幸福な生活が続けていけるとは思われなのだから、ことによってはここをまた最後の隠れ家として私は帰つて来るつもりだから、そうなればまたあなたに逢うこともできますが、しばらくでも別れ別れになって、寂しいあなたの残るのを捨てていくかと思うと、私の進まない心はいっそう進まなくなります。あなたのような姿になつた人だつても、絶対に人づきあいをしないものではないようなのですからね、そうした人と同じ気持ちになつて、時々私の所へも来てください」

などと女王はなつかしいふうに話していた。大姫君の使つていて、なお用に立つような手道具類は皆この人へのこしておくことに中の君はした。

「だれよりも深くお姉様を悲しんでいくるあなたを見ると、深い縁が前生からあつたのではなからうかと、こんなことも思われて特別なものにあなたが見えます」

こんなことを言われて、いよいよ弁の尼は子供が母を恋しがって泣くように泣く。自身の気持ちをおさえる力も今はないように見えた。

山荘の中はきれいに片づき、荷物はできて、中の君の乗用車、その他の車が廊に寄せら

れた。前驅を勤める人の中に四位や五位が多かった。兵部卿ひょうぶきやうの宮御自身でも非常に迎えにおいてになりたかつたのであるが、たいそうになつてはかえつて悪いであらうと、微行の形で新婦をお迎えになることを計らわれたのであつて、心配には思召おぼしめされた。源中納言のほうからも前驅を多人数よこしてあつた。だいたいのことだけは兵部卿の宮が手落ちなくお計りになつたのであるが、こまごまとした入り用の物、費用などは皆薫かおるが贈つたのであつた。

出立が早くできないでは日が暮れると女房にようばうらも言い、迎えの人たちも促すために、中の君はあわただしくて、今から行く所がどんな所かと思うことで不安な落ち着かぬ悲しい気持ちを抱きながら車上の人になつた。大輔たゆうという女房が、

ありふればうれしき瀬にも逢あひけるを身を宇治川に投げてましかば

と言つて、笑顔えがほをしているのを見ては、弁の尼の心境とはあまりにも相違したものであると中の君はうとましく思つた。もう一人の女房、

過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はた先づも行く心かな

この二人はどちらも長くいた年寄りの女房で、皆大姫君付きになるのを希望した者であったが、利己的に主人を変えて、今日は縁起のよいことより言つてはならぬと言葉を慎んでいるのもいやな世の中であると思う中の君はものも言われなかった。道の長くてけわしい山路であるのをはじめて知り、恨めしくばかり思つた宮の通い路の途絶えも無理のない点もあるように思うことができた。白く出た七日の月の霞んだのを見て、遠い路に馴れぬ女王は苦しさに歎息しながら、

ながむれば山より出でて行く月も世に住みわびて山にこそ入れ

と口ずさまれるのであつた。変わった境遇へこうして移つて行つてそのあとはどうなるであろうとばかり危ぶまれる思いに比べてみれば、今までのことは煩悶の数のうちでもなかったように思われ、昨日の世に歸りたくも思われた。

十時少し過ぎごろに二条の院へ着いた。まぶしい見も知らぬ宮殿の幾つともなく棟の別

れた中門の中へ車は引き入れられ、そのころもう時を計って宮は待っておいでになったのであったから、車の所へ御自身でお寄りになり、夫人をお抱きおろしになった。夫人の居間の装飾の輝くばかりであったことは言うまでもないが、女房の部屋部屋にまで宮の御注意の行き届いた跡が見え、理想的な新婦の住居^{すまい}が中の君を待っていたのである。

宮がどの程度に愛しておいでになるのか、妾^{しやう}としてか、情人としての御待遇があるかと世間で見えていた八の宮の姫君はこうしてにわかには兵部卿親王の夫人に定まってしまったのを見て、深くお愛しになつてゐるに違いないと世間も中の君をりっぱな女性として認め、かつ驚いた。

源中納言はこの二十日ごろに三条の宮へ移ることにしたいと思い、このごろは毎日そこへ来ていろいろな指図^{さしず}をしていたのであるが、二条の院に近接した所であつたから、中の君の着く夜の気配^{けはい}をよそながら知りたく思い、その日は夜がふけるまで、まだ人の住まぬ新築したばかりの家にとどまつてゐるうちに、迎えに出した前驅の人たちが帰つて来て、いろいろ報告した。兵部卿の宮が御満足なふうで新婦を御大切にお扱いになる御様子であるということを聞く薫は、うれしい気のする一方ではさすがに、自身の心からではあつたが得べき人を他へ行かせてしまったことの後悔が苦しいほど胸につのつてきて、取り返し

得ることはできぬものであろうかと、こんなうめきに似たひとりごと独言も口から出た。

しなてるやにほの湖に漕ぐ船の真帆まほならねども相見しものを

とあの夜のことでちよつと悪く言つてみたい氣もした。

左大臣は六の君を兵部卿の宮に奉るのを、この二月にと思つていた所へ、こうした意外な人をそれより先にとつて夫人として堂々とお迎えになり、二条の院にばかりおいでになるようになったのを見て、不快がつているといふことをお聞きになつては、また氣の毒にお思われになる兵部卿の宮は手紙だけを時々六の君へ送つておいでになつた。裳着もぎの式の派手はでに行なわれることがすでに世間の噂うわさにさえなつていたから、日を延ばすのも見苦しいことに思われて二十幾日にその式はしてしまつた。一家の内輪どうしの中の縁組みは感心できぬものであるが、薫の中納言だけは他家の婿に取らせることは惜しい、六の君を改めてその人に娶めとらせようか、長く秘密にしていた宇治の愛人を失つて憂鬱ゆううつになつてゐるおりからでもあるからと左大臣は思つて、ある人に薫の意向を聞かせてみたが、人生のはかなさを実証したことに最近逢あつた自分は、結婚のことなどを思うことはできぬと相

手にせぬ様子を聞き、どうして中納言までが懇切に自分のほうから言いだしたことに氣のないような返辞をするのであらうと、一時は恨んだものの、兄弟ではあつても敬服せずにおられぬところの備わつた薫に、しいて六の君を娶らせることは断念した。

陽春の花盛りになつて、薫は近い二条の院の桜の梢こずえを見やる時にも「あさぢ原主なき宿のさくら花心やすくや風に散るらん」と宇治の山莊が思いやられて恋しいままに、におうみ 匂

宮やをお訪ねしに行つた。宮はおおかたここにおいでになるようになって、貴人の夫人らしく中の君も住み馴なれたのを見て、その人の幸福を喜びながらも怪しいあこがれの心はそれにも消されなかつた。ますます中の君が恋しくなつていく。しかし本心は親切で、中の君を深く庇護ひごしなければならぬことを忘れなかつた。

宮と薫は何かとお話をし合つていたが、夕方に宮は御所へおいでにならうとして、車の仕度したくがなされ、前驅などが多く集まつて来たりしたために、客殿を立つて西の対の夫人の所へ薫はまわつて行つた。山莊の寂しい生活をしていた時に変わり、御簾みすの内のゆかしさが思われるような、落ち着いた高華な夫人の住居すまいがここに営まれていた。美しい童女の透き影の見えるのに声をかけて、中の君へ消息を取り次しとねがせると、褥しとねが出され、宇治時代からの女房で薫を知つたふうの人が来て返辞を伝えた。薫は、

「始終お近い所に住んでおりながら、何と申す用がなくて伺いますことは、なれなれしすぎたことだとかえってお咎めを受けることになるかもしれないと御遠慮しておりますうちに、世界も変わってしまいましたようになりました。お庭の木の梢も霞越しに見えているのですから、身にしむ気のある時も多いのです」

と取り次がせた、物思わしそうにしている薫の姿の気の毒なのを中の君は見て、あの人
が惜しむどおりに大姫君が生きていて、あの人
の所に迎えられておれば、近い家のことで、
始終消息ができ、花鳥につけても少し愉しい日送り
ができたであろうがなどと、姉君を思
い出すと、忍耐そのものが生活であったよ
うな宇治の時のほうが、かえって悲しみも忍び
よかったように思われ、故人の恋しさのつ
のるばかりであった。女房たちも、

「世間の習いどおりに、うとうとしくあ
の方様をお扱いになつてはなりません。今こ
うおなりあそばしてからこそ、あの方
様の御親切の並み並みでないことがお
わかりになつた御感謝の心をお見せあ
そばすべきでございます」

こう言つて勧めていたのであつたが、
にわかに自身で話に出るようなことは
なお恥ずかしくて中の君が躊躇
をして
いる時に、お出かけになろうとする宮
が、夫人に言葉をかけるためにこの西
の対へおいでになつた。きれいなお身
なりで、化粧も施され、見て見が

いのある宮様であつた。薫のこちらに来ていたのを御覧になり、

「どうしてあんなによそよそしい席を与えていらつしやるのですか。あなたがたの所へはあまりにしすぎると思うほどの親切を見せていた人なのだからね。私のためには多少それは危険を感じべきことではあつても、あんなに冷遇すれば男はかえつて反発的なことを起こすものですよ。近くへお呼びになつて昔話でもしたらいいでしょう」

こんなことを夫人に言われたのであるが、また、

「しかしあまり気を許して話し合うことはどうだろう。疑わしい心が下に見えますからね」
ともお言いになつたので、どうすればいかわからぬようなめんどろさを中の君は感じた。自分にもまれな好意の寄せられたのを知っているのであつたから、今の身になつたからといつて、うとうとしくできるものでない、あの人も言うように、姉君の代わりと見て、感謝している自分の心をあの人に見せうる機会があればよいと願っているがと中の君は思うものの、さすがに宮がとやかくと嫉妬しつとをあそぼすのは苦しかった。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

早蕨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>